| 19 | 安城 | 安城南部小学校 | アンドウ　ホナミ<br>名前　　安 藤　帆 南 |
|---|---|---|---|

| 分科会番号 | 特 | 分科会名 | 「特別の教科　道徳」特別分科会 |
|---|---|---|---|

## １　研究主題

「他者や自分自身との関わりの中で、多様な考えや思いを認め合うことができる子どもの育成」

～　４年　道徳科の授業を通して　～

## ２　研究成果の概要

本研究では、自分とは異なる考え方や興味のないものに対しては、耳を傾けることができず、自分のことが中心となってしまう児童が、他者や周囲との関わりの中で、多様な考えや思いがあることに気づき、自分とは異なる意見にも耳を傾け、それらを認め合うとともに、よりよい関係性を築こうとすることができることを目指して研究を進めた。

道徳科において、他者の意見に触れる機会を、授業の中に設けた。そうすることで、多様な意見があることに気づくことができた。また、多様な考えを、受け入れ、自分の考えと結び付けて考えようとする児童が増えたことが、振り返りや、授業での発言、タブレットの「気づきメモ」のコメントから見られた。

## ３　研究のまとめ

(1)　児童の実態と目指す姿

本学級の児童は、自分の興味のある物事に対して、意欲的に学ぼうとすることができる。例えば、理科「春の動物と植物の様子」の単元では、身近な動植物の様子に興味をもち、色、形を細かく観察し、ノートに書くことができる児童がいたり、体育「ダンス」の単元では、自分の満足がいく演技を行うために休み時間を使って練習する児童もいたりする。また、よいと思ったことには、自分から進んで働きかけ、周囲に広げていったり、つなげていったりしようとする姿も見られる。しかし、これは一部の児童で、大半の児童が自分とは異なる考え方や興味のないものに対しては、耳を傾けることができず、自分のことが中心となってしまう。

以上のことから、道徳科において、他者や周囲との関わりの中で、多様な考えや思いがあることに気づき、自分とは異なる意見にも耳を傾け、それらを認め合うとともに、よりよい関係性を築こうとすることができるような児童になってほしいという願いを込めて、本主題を設定した。

(2) 研究の仮説

| |
|---|
| 仮説１<br>　他者の考えに触れる機会を多くすることで、相手や周囲のよさに気付くことができるようになるだろう。 |

＜仮説１に迫るための手立て＞

① タブレットの「ポジショニング」を用いて出された児童の考えを共有できるようにする。

② 補助発問を工夫し、グループでの話し合いの場を設け、考えを深められるようにする。

③ ゲストティーチャーから話を聞き、考えを深められるようにする。

| |
|---|
| 仮説２<br>　授業の最初と最後の自分の考えを比較する機会を設けることで、多様な考えの価値に気づくことができるようになるだろう。 |

＜仮説２に迫るための手立て＞

① ICT 機器を用いて、自分の考えの変容を明確にする。

② 授業の振り返りの視点を示すことで、考えの深まりを感じられるようにする。

(3) 研究の実践

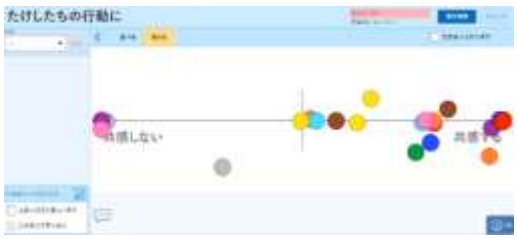
ア　仮説１について

**手だて①タブレットの「ポジショニング」を用いて出された児童の考えを共有できるようにする。**

**「『正直』五十円分」内容項目Ａ（２）（正直、誠実）**

本教材は、まず、たけし（兄）とひろし（弟）が店でジュースを買ったとき、おつりが５０円足りなかったので、すぐに店のおばちゃんに言って５０円を返しもらう姿が描かれている。その翌日、２人はたこ焼きを買ったが、今度はおつりが５０円多い。そのとき、正直に言おうかどうか迷うたけしの姿に注目する。正直に言うのが正しいのだろうけど、言えない自分もいる。たけしの姿に共感し、考えることを通し、人間的な弱さも認め合うことで、自分の考えだけではなく他者の考えを受け入れる大切さに気付いてほしい。

授業では、中心発問を「たけしの気持ちに共感できるだろうか」とし、学習用タブレットのポジショニング機能で自分の考えを表した。(資料１)。児童がポジショニング機能で自分の考えを表明した後、大画面に表示し、全体で共有した。ポジショニング機能を活用することで、声を出して表すのではなく、マークを並べたり、文字で表したりすることができ、普段、自らの意見を表明することに消極的な児童も含め、一斉に全員の考えが画面上に表示され、共有することができた。また、多くの児童が大画面を見て、「え！みんなこんな考えなんだ」「なんでだろう」「どういうことだろう」とつぶやく姿があり、他者の考えに興味を示すことができた。




**【資料１　ポジショニングで示した児童の考え】**

**手だて②補助発問を工夫し、グループでの話し合いの場を設け、考えを深められるようにする。**

「『正直』五十円分」では、たけしの行動に「共感するか」「共感しないか」と、発問した際、二択では表すことができなかった児童も多くいた。そこで一通り児童の意見を聞いた後、「数直線の残りの数パーセントはどんな気持ちからか」と補助発問を投げかけ、グループで話し合いの時間を設けた。児童は、補助発問により「少しはお金がほしいと思ってしまうかも」「絶対ばれないよな」「たったの５０円だから」「返したくないけど返したほうがいいのはわかる」などと、誰しもがもつ人間の心の弱さを認め合う姿があった。また、「感謝されるから正直に行動する」という意見を取り上げ「誰にも感謝されなければ正直に行動しないのか」補助発問をした。それでも、「感謝されたい」と思う児童に対して「自分がもやもやするよ」「絶対後悔するよ」という考えが出た。児童は、友達の考えを聞き、「たしかに」「感謝はその結果のことだから」と、自分の考えを深めていた。異なる見方から、たけしの行動を見つめ直すことで、なぜ正直に行動することが大切なのか深く考えることができた（資料２）。

**【資料２　授業記録】**

T　感謝されたいから正直に行動するの？
C　大人になっても自分のためにおつりが多かった分を返した方がいい。
C　感謝はされたいよ。
C　ちょっとダメなことが心に残っちゃう。絶対後悔するよ。
C　サービスや感謝はついでだから。そのためではなくて、自分のため。
C　そのまま返さなかったら、嫌な気持ちになる。もやもやする。
C　感謝されなくても自分がいやだから。
C　正直に言わなくても正直に言うと解放感がある。
C　感謝はその結果のことだから。

**手だて③ゲストティーチャーから話を聞き、考えを深められるようにする。**

「ブラッドレーのせい求書」内容項目Ｃ（１４）（家族愛、家庭生活の充実）

本教材は、母親に「お使い代１ドル・・・」と書いた請求書を渡したブラッドレーが母親から、にっこり笑って、「親切にしてあげた代０ドル・・・」と書かれた請求書を渡され、涙を流すという内容である。ブラッドレーやブラッドレーの母親の心情について考え、話し合う活動を通して、家族の自分に対する愛情に気付き、家族のために積極的に関わろうとする態度を育てることをねらいとしたが、実際に母親の立場を経験したことがない児童にとって、ブラッドレーの母の気持ちを十分に理解することは難しいと考え、ゲストティーチャーとして子どもを持つ母親を招き、家族を思う母親の気持ちを話していただいた。ゲストティーチャーから話を聞く前は、「母はどんな気持ちで０ドルの請求書を渡したのだろうか」という問いに対して、「ブラッドレーに悪いこと

**【資料３　気づきメモで表した児童の考え】**

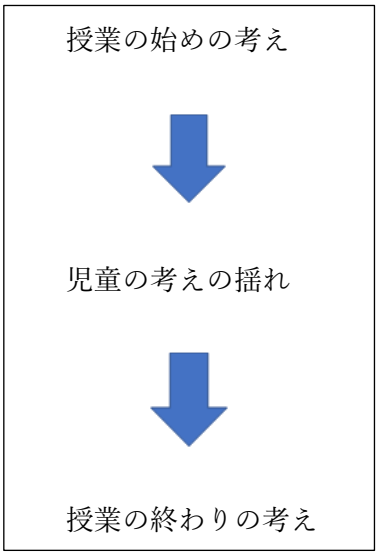
をしていると気付かせたかった」「お金を請求するような子どもになってほしないから」など母親の子どもに対する無償の愛に気付いている児童はほとんどいなかった。しかし、実際に母親の立場からの話を聞いた後、「ゲストティーチャーの話を聞いてどう思ったのか」を考えることで、「家族は大切だから」「いるだけで幸せだから」「お母さんは子どもを愛している」などと、母親の愛に気付いている児童が多くいることが、タブレットの「気づきメモ」でつぶやいた児童の発言からわかった。様々な立場の人から話を聞くことで、多様な考えや思いがあることに気付くきっかけとなった（資料３）。

イ　仮説２について

**手だて①ICT 機器を用いて、自分の考えの変容を明確にする。**

**「ひとりぼっちのＹちゃん」内容項目Ｃ（８）（公正、公平、社会正義）**

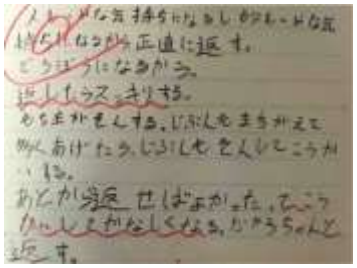
本教材は、なんとなく好きになれないＹちゃんに意地悪を始めた「わたし」を中心とした話である。つられてＹちゃんを嫌う人が出てきたが、いまさらＹちゃんの味方をしたら自分がみんなに嫌われると考えた「わたし」は、意地悪をやめられない。その姿に注目して、だれに対しても公平に接することの大切さについて考えさせ、だれに対しても分け隔てなく接しようとする心情を育てることをねらいとした。授業の始めに、自分がこのクラスの一人だったら、「やめよう」と言うのか、「一緒に意地悪をしてしまうかもしれないのか」と発問し、ポジショニング機能で自分の考えを表す活動を行った。授業の終わりにも再度同じ発問でポジショニング機能で自分の考えを表す活動を行った。その結果、マークの位置が変化した児童が多くいた。また、始めと終わりのマークの位置が同じでも、途中で考えが揺れていたり変化していたりしている児童がほとんどであった。このことや児童のコメントからも考えが深まっていることがわかった。マークの変化、コメントが、タブレットに記録として残ることで、授業を通した自分の考えの変化を可視化することができた（資料４）。

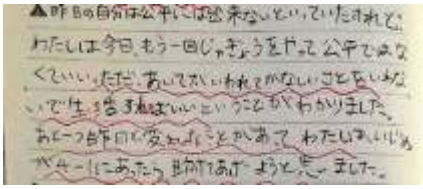


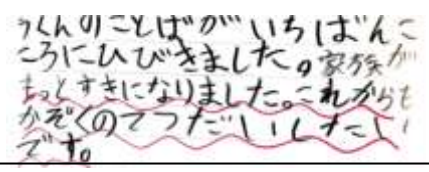

**【資料４　児童の考えの変化】**

**手だて②授業の振り返りの視点を示すことで、考えの深まりを感じられるようにする。**

３つの授業全てにおいて、めあてに対して自分が考えたこと、また、この授業を通して自分の考えが変わったと思ったことを振り返りに書くように指示した。「『正直』五十円分」では、「正直に言わないとおこられるから」と考えていた児童も「すっきりするから」「こうかいして悲しくなるから」と、他者に言われるから ではなく、自分のためになぜ正直に言うことがよいのかまで考えを広げたり、深めたりしたいた児童の振り返りが多く見られた（資料５）。「ひとりぼっちのＹちゃん」では資料の記述のように、始めは、「公平にはできないな。なぜかというとやっぱりきらいなやつには関わりたくないから」という思いをもっていた児童も、「公平ではなくていい。ただ、自分のクラスでいじめとかがあったら助けてあげたい」という思いをもつことができた（資料５）。








**【資料５　道徳ノート】**

(4)　考察

この実践では、タブレットの「ポジショニング」で児童の考えを共有したり、補助発問を工夫し、グループでの話し合いの場を設けたりなど他者との関わりの中で、多様な考えや思いに触れる機会を設けたことで、自分とは異なる意見にも耳を傾ける児童が増え、児童の考えを深められたと考える。

しかし、タブレットやノートには残らない児童のつぶやきを、広げることができなかった。何気なく出る児童のつぶやきには、考えを深めるきっかけや、道徳的価値につながる言葉等が含まれている。タブレットやノートに記された考えとともに、児童のつぶやきを意図的に広げることで、児童が他者や自分自身と関わり、多様な考えや思いを認め合えるようにしていきたい。